

1 エドウィンとエマ

- 谷の小道を遙かに行けば  
繁る木々の後ろにひっそりと  
静けさに満ちた安らぎの場  
つましい小屋が立っていた
- 母に見守られ 5  
エマは今を盛りの美しさ  
母の願いはただひとつ  
みまかる前に娘の幸せを見届けること
- 年頃となったエマの頬には  
この上なく柔らかな 恥じらいの色がのっている 10  
その色は春の甘美な夜明けに  
天が微笑む時に広がる真珠の色
- 傲慢な身分高き人々に  
田舎娘の美しさを嘲笑<sup>わら</sup>わせることはすまい  
金持ちの宝石をキラキラ輝かせる太陽は 15  
ユリ色のエマの頬を宝石に負けず輝かせたまうのだ
- エマの美しさに若者たちは長らく心奪われて  
振り向かれぬ乙女たちは憔悴した  
皆が不思議に思ったのは  
エマが自らの美しさに気付かぬこと 20
- 誇り高き若者エドウィンが現れた  
策を弄さぬ素朴な心根  
その眼差しは穏やかで  
優しい心を映していた
- すぐさま 二人は燃える愛に捉えられ 25  
すぐさま お互いの気持ちを知った  
どちらの胸にも  
その想いを隠す気はなかった

いかに安らぎに満ちた至福の時を  
愛が二人に与えたことか 30  
だが あまりにも大きな至福の時に  
運命は二人の邪魔をする

エドウィンの姉はまるで嫉妬<sup>ひとがた</sup>の人形  
人の不幸を喜ぶ人  
邪<sup>よこしま</sup>なやり方で二人の仲を引き裂こうと 35  
ありとあらゆる汚い手を使った

エドウィンの父も邪悪な男  
愛も慈悲も知らぬ人  
土くれのように冷たい心で  
金を溜め込んだ男 40

二人の秘めた想いに気付き  
その想いは変わらぬと分かるや否や  
父親ぶったしかめ<sup>づら</sup>面して  
反対を厳しく言い渡した

エドウィンの優しい心は 45  
あれこれの想いで千々に乱れた  
生来 反抗<sup>たち</sup>の質ではないが  
愛をあきらめることはできなかった

会うことを禁じられ 幾度となく  
葉を広げたサンザシの後ろに忍び寄った 50  
エマをひと目見たくて  
エマが泣きながら歩く場所を知りたくて

幾度となく スタンモアの寒々とした荒野を  
月の光が影つくる場を  
やつれた魂を吐き出すようなため息をつき 55  
真夜中に エドウィンは嘆きながらさまよった

健やかに美しく輝いていたエドウィンの頬は  
血の気の失せた死者の顔色に変わった  
盛りのバラが  
北からの突風に萎れてしまうかのようにだった 60

エドウィンの父母は後悔も<sup>むな</sup>虚しく

死の床の息子を見守った  
実り無き誓いをたてては天を悩ませ  
実り無き悲しみの涙にくれた

エドウィンは呻いた 「もう終わった 65  
だが 慈悲があなたがたの心をまだ動かせるなら  
かすみゆくこの目に もう一度  
愛しいエマの姿を見せてほしい」

エマはやって来た エドウィンの冷たい手にそっと触れ  
とめどない涙で濡らした 70  
青ざめたサクラソウが  
朝露にしっとり濡れるかのようにだった

だが ああ エドウィンの姉は  
嫉妬深く残酷な人  
「エドウィン 私のために生きてちょうだい」 75  
このエマの言葉を聞かせなかった

望みなく 涙にくれて 家へ帰る道すがら  
エマが教会墓地を通りかかると  
冷たい風が吹きつけ 黒フクロウが金切り声で  
エドウィンの 弔いの歌をうたった 80

夜の闇が落ちかかる中  
あらぬ妄想に捉えられ  
エマは茂みの中を彷徨うエドウィンを見た  
あらゆる音がエドウィンの 呻きに聞こえた

ひとりぼっちで 恐怖に怯え 85  
エマは幻想の中で谷を歩いた  
弔いの鐘は耳を打ち  
悲しみの音は突風に舞った

そのとき 震える足で辿り着いたのは  
年老いた母の家 90  
エマは泣いた 「エドウィンは逝ってしまった  
二度とあの天使のお顔には会えない

碎けてゆくこの心の臓が  
脇腹で激しく脈打っている」

色白の腕で支えていた頭はガクリと落ち  
震えるようにため息をつき エマは息絶えた

95

(中島久代訳)